

Title	神奈川県下組貝塚に於ける自然遺物
Sub Title	
Author	大給, 尹(Ogyu, Tadashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1943
Jtitle	史学 Vol.22, No.1 (1943. 9) ,p.30- 44
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19430900-0030

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

神奈川縣下組貝塚に於ける自然遺物

大 給 尹

加發表する考である。

又、同貝塚發掘には、不幸にして筆者は一度も參加して居らないので、出土状態其他現場の詳細は、孰れ發表せらるべき本報告に譲りたい。出土量其他の點は、終始發掘に従事せられた竹下次作氏の話に主として依る事とし、遺物そのものは、筆者の囑目した採集品のみによつたものなる事を附言して置きたい。

二

今回檢出し得たる自然遺物は次の如くである。

I 軟體動物 *MOLLUSCA*

一
昨昭和十七年、慶應義塾大學史學科考古室に依つて、神奈川縣横濱市港北區（橋樹郡橋村下田）^{シモケミ}下組貝塚の發掘が行はれた。右は約一年間に亙り十數回の發掘が續行されたのであるから、遺物も夥しく、目下其整理が續けられては居るが、其發表には猶相當の時日を要する見込である。然るに筆者が主として擔當せる同貝塚發見の自然遺物に就ては、今回幸に一先づ整理を終つたので、此際本報告とは別個に一應報告して置きたい。但し、目下、猶不明の遺物も残つて居るので、是等は追

a	腹足類	GASTROPODA			
1	ア ワ	<i>Haliotis (Sulculus) gigantea</i> Gmelin	10	ン イ	<i>Thais (Mancinella) bronni</i> (Dunker)
2	イ シ ダ タ ミ	<i>Monodonta labio</i> (Linné)	11	イ ホ ニ シ	<i>Thais (Mancinella) clavigera</i> (Kister)
3	ス ガ ロ	<i>Turbo (Lunella) coronatus</i> <i>corensis</i> Récluz	12	ッ イ	<i>Babylonia japonica</i> (Reeve)
4	カ ハ ニ ナ	<i>Melanooides (Semisulcospira)</i> <i>libertina</i> (Gould)	13	ア ラ ム シ ロ	<i>Nassarius (Hinia) festivus</i> (Powys)
5	イ ボ ウ ミ ニ ナ	<i>Batillaria zonulis</i> (Bruguière)	14	ナ ガ ニ シ	<i>Fusinus perplerus</i> (A. Adams)
6	ウ ミ ニ ナ	<i>Batillaria multiformis</i> (Lischke)	15	ヒ メ キ セル	<i>Hemiphaedusa micropetas</i> (Möllendorff)
7	キ ク ス ッ メ	<i>Amalthea conica</i> Schumacher	16	ヒ カ リ ギ セル	<i>Hemiphaedusa (Zaptychopsis) buschi</i> (Kister)
8	ツ メ タ ガ ロ	<i>Natica (Neverita) didyma</i> ("Bolten" Röding)	17	ナ ミ キ セル	<i>Hemiphaedusa (Stereo-phaedusa) japonica</i> Crosse
9	ア カ ニ シ	<i>Rapana thomasiama</i> Crosse	18	オ ホ ケ マ イ マ イ	<i>Aegista (Plectotropis) vulgicaga</i> (Schumacher et

- | | | | | | |
|----|----------------------------|-----------------------------------|----|--------------------------------|----------------------------------|
| | | Böttger) | | | |
| 19 | ヒダリマキマイマ | <i>Euhadra quaesita</i> | 27 | ヤマトシ | <i>Corbicula japonica</i> Prime |
| | (Deshayes) | | 28 | ウネナシトマヤガヒ | <i>Trapezium japonicum</i> |
| | | | | Pilsbry | |
| | b 掘足類 | SCAPHOPODA | 29 | ハマグリ | <i>Meretrix meretrix</i> (Linné) |
| 20 | ツノガヒ | <i>Dentalium (Antalis) wein-</i> | 30 | カガミガヒ | <i>Dosinia (Ph. cosoma)</i> |
| | <i>kanjii</i> Dunker | | | <i>japonica</i> (Reeve) | |
| | c 雙殻類 | BIVALVIA | 31 | オキシ | <i>Cyclina sinensis</i> (Gmelin) |
| 21 | カリガネエガヒ | <i>Barbatia obtusoides</i> (Nyst) | 32 | アサリ | <i>Venerupis (Amygdala)</i> |
| 22 | ハイガヒ | <i>Anadara granulosa</i> (Linné) | | <i>philippinarum</i> (Adams et | |
| 23 | サルボホ | <i>Anadara (Scapharca)</i> | | Reeve) | |
| | <i>subrenata</i> (Lischke) | | 33 | シホフキ | <i>Maetra veneriformis</i> |
| 24 | アカガヒ | <i>Anadara (Scapharca)</i> | | Deshayes | |
| | <i>infata</i> Reeve | | 34 | ミルクヒ | <i>Schizothaerus nuthali</i> |
| 25 | イタボガキ | <i>Ostrea denselamellosa</i> | | (Conrad) | |
| | Lischke | | 35 | イソシ | <i>Sanguinolana (Nuttallia)</i> |
| 26 | マガキ | <i>Ostrea (Crassostrea)</i> | | <i>olivacea</i> (Jay) | |
| | <i>lapelousei</i> Schrenck | | 36 | マテガヒ | <i>Solen gouldi</i> Conrad |

37 オホノガヒ *Mya* (*Arenomya*) *arenaria* 5 ヤ *Ptylosurus anastomella*

japonica Jay (Cuvier & Valenciennes)

d 頭足類 CEPHALOPODA (Dentary)

38 カフイカ的一種 *Sepia* sp. 6 ホ *Mugil cephalus* Linné (Pre-

II 節足動物 ARTHROPODA orbital, nasal, preopercle,

a 甲殻類 CRUSTACEA op., interop., quadrate,

1 フヂツボの一種 *Balanus* sp. 7 マ ア *Caranus trachurus japonicus*

III 脊椎動物 VERTEBRATA sphenoid, vert., etc.)

a 魚類 PISCES 7 ア *Caranus trachurus japonicus*

1 サメの類 *Selachii* sp. (Vert.) 7 マ ア Temminck & Schlegel

2 エビの類 *Decapoda* sp. (Caudal spine) (Vert.)

3 コヒ科の一種 *Cyprinidae* sp. 8 ブ *Seriola quinqueradiata* Tem.

(Pharyngeal teeth) & Sch. (Premax., dent.)

4 ハ *Muraenesox cinereus* 9 ス ズ *Lateolabrax japonicus* (Cuv.

(Forskål) (Premaxillary, & Val.) (Premax., max.,

entary, opercle, vomer, dent., articular, preop., op.,

frontal, vertebrae.) palatine, epiphyal, urohyal,

- | | | | | | | | | | | | |
|----|---|---|---|--|--|----|----|---|---|----------|--|
| 10 | ノ | ダ | ノ | <i>Sparus aries</i> (Tem. & Sch.)
(Premax., dent.) | 15 | コ | チ | <i>Platycephalus indicus</i>
(Linné) (Premax., max.,
dent., art., preorb., interop.,
pal., pihyal, ceratohyal,
paras ph., etc.) | | | |
| 11 | ク | ロ | ダ | ノ | <i>Sparus longispinis</i> (Tem.
& Sch.) (Premax., max.,
dent., quad, pal., posttemp.,
supraclav., etc.) | 16 | カナ | ガ | シ | ラ | <i>Lepidotrigla microptera</i>
Günther (Preorb., prefront.) |
| 12 | マ | ダ | ノ | <i>Pagrosomus major</i> (Tem.
& Sch.) (Premax., max.,
dent., art., nas., op., quad.,
pal., hypercor., hypocor.,
pervic giridle, parasph.,
vert., occipitals.) | 17 | ヒ | ラ | ヌ | <i>Paralichthys olivaceus</i>
(Tem. & Sch.) (Premax.,
max., dent., preop.,
hyomandibular, quad.
ceratohyal, urohy., last
vert., hypptural) | | |
| 13 | チ | ダ | ノ | <i>Evimnis japonica</i> Tanaka
(Jaw bones) | 18 | カ | レ | イ | ノ | 類 | <i>Pleuronectidae</i> sp. (Vert.) |
| 14 | キ | ダ | ノ | <i>Taius tumifrons</i> (Tem. & | | b | 鳥 | 類 | AVES (種名不詳) | | |
| | | | | | | c | 哺 | 乳 | 類 | MAMMALIA | |

1 牛ノシ、*Sus leucomystax*

2 シカ *cervus nippon*

3 イヌ(家犬) *Canis familiaris*

4 タヌキ *Nyctereutes viverrinus*

以上を要するに、

貝類では、巻貝類(腹足綱)一九種、二枚貝類(雙殻綱)一七種、掘足綱一種。右の内、陸産種は、腹足類に五種。淡水産種は、腹足類に一種、雙殻類に一種。他は全部、鹹水産種である。他に甲イカの類一がある。

節足動物としては、フヂツボの類一種。魚類は一八種。その内、淡水産種一種。哺乳類四種。内に家畜(犬)がある。合計、三動物門、八綱、六二種である。

次に、特に魚類について、少しく追記して置きたい。

神奈川県下組貝塚に於ける自然遺物(大給)

從來、貝塚より發見せらるゝ魚類に關しては、夙に岸上博士の卓拔なる研究があるが、爾後、他方面の著しい進歩發展を見たに拘らず、この方面の研究が、全く停頓の状態を永く續けて來た事は誠に遺憾である。

こゝに申す迄もなく、貝塚等より發見せられる魚骨は、その脆弱なる爲めと、その零細なる爲め、或は破損して一骨骼の一小部分のみが單獨に出土する爲め、種名を検出するに困難が多く、少數種の或る特定の骨骼部分を得て、始めて、僅少種を検出し得るに過ぎなかつた。右は、上記の事情の下に發見される爲めのみならず、現生種の骨骼に關する知識の不足の爲めに、一層困難が多かつた事は謂ふ迄もない。

然るに、當貝塚發掘に際しては、特に魚骨を採集する目的を以て、大山先生を始め發掘に當つた方々が、極めて慎重に採集せられた結果、曾て見

ざる好資料を得る事が出来て、一貝塚より一八種にのぼる魚の種名を擧げる事が出来た。右一八種類の内、サメ、エヒ、ボラ、スズキ、クロダヒ、マダヒの六種は従来も屢々発見、検出し得た種類であるが、ヘダヒ^(四)、ヒラメ^(五)は稀に検出されたのみであり、ブリ^(六)、マアジ^(七)、コチ^(八)、カレイ^(九)の類は岸上博士以後、恐らく検出されし事なき種類である。更に、ハモ、ダツ、キダヒ、カナガシラの四種は、貝塚より、恐らく、今日始めて検出し得たる種類である。

以上の他、各種の検出部分に至つては、従来と比較すべくもない結果を得る事が出来た。

上述の如く、新らしく、或は稀に検出し得た種類もあるので、次に各種に就て、簡単に附記して置きたい。

(3) コヒ科の一種は、恐らくウグヒと思はれる咽頭骨二個であるが、破損してゐて、明かでない。

(4) ハモ^(一〇)は、前掲の表にある如き各部分骨がある。額骨に依れば、十二尾を數えうる。その内、大なるものは、全長二米に達したと思はれるものもあり、又、極く小さいものもある。

(5) ダツは、齒骨の破片二個。

(7) マアジは、大形のもの、脊椎骨三個。

(8) ブリは、上顎と下顎の齒のある部分の骨各一個であるが、謂所、ワラサと云ふ小さいものではなく、非常に大きい。

(10) ヘダヒは、非常に澤山発見され、その形も、この種の最大限の大きさに達したと思はれるものが多い。

(14) キダヒは、上顎と下顎各一個、形は非常に大きい。

(15) コチ^(一一)、各部分骨が可成り多い。左の齒骨によれば、九尾を數へうる。形も大きいものが多い。

(16) カナガシラ、恐らく一尾、餘り大きくない。

(17) ヒラメは、數も多く、形は大小混在する。
(18) カレイ類の脊椎骨二個であるが、種は解らない。

以上の他、(12) マダヒ (13) チダヒは餘り多くなく、形も中形であるが、(6) ボラ、(9) スズキ、(11) クロダヒは極めて多く、形も非常に大きいものから、小さいものまである。(2) エヒは尾棘が一個あるのみである。

三

先づ貝類を見るに、最も多量に發見される類は、中或は大形のハマグリであり、次いで普通大のシホフキ、中或は小形のハイガヒ、大形のイソシヅミ、カキ等である。次いで、アカニシ、イボニシ、サルボホ、カヅミガヒ、オキシヅミ、オホノガヒ等であつて、他は少量或は稀であつた。

右に依つて、下組貝塚附近は一般に遠淺の砂或

は砂泥底の海であつた事を知る事が出来る。けれども一面、少量乍ら、アワビ、イボニシ、イシダタミ等の岩礁に棲む類の存在から、或る場所には岩礁のある海岸も有つた事が知られる。

當貝塚にはヤマトシヅミ、カハニナ等が少量乍ら混じてゐるが、全般より推して純鹹貝塚と稱すべきである。けれど之によつて一方には淡水の存在を知る事が出来る。

以上貝類に依つて大體推測されたる海岸の情況は、魚類に依つても亦之を證する事が出来る。當貝塚より最も多量に發見される魚類は、クロダヒ、スズキ、ボラであり、次いでマダヒ、チダヒ類であり、ハモ、コチ、ヒラメ等も相當量に達する。即ち、クロダヒ、スズキ、ボラ等の最も多く發見される魚類は、河口等のある、淡水の混入する海岸近くに群來するものであつて、是等の好漁場附近は、又、シヅミ、シホフキ、ハマグリ等の饒産

したであらう處である。コチ、ヒラメの棲む砂泥底にも同時に夥しい貝類が居たであらう。

ハモは、砂泥底にも現れるが、多少岩礁のある海に棲み、晝は、アワビ、イボウミニナ、イシダ、

ミ等の棲む岩の下に潜んでゐたものと思はれる。^(二三)

更に、コヒ科の一種(恐らくウグイ)は、シ、ミ、カハニナと共に淡水に棲んでゐたであらう。^(二四)

右に依つて、下組貝塚の附近は、砂泥底の淺海が廣く發達し、或る場所には多少の岩礁のある海岸が有り、又一方には淡水を注入しつゝ、あつた河も存在したであらうと想像される。

この海は、恐らく、現在よりは多少暖かつた様である。

餘り大きくはないが、中形小形のハイガヒが貝塚から多量に出土する。^(二五) 又、可成り大きいイソシバミが多量に存在する事は、當貝塚の特徴の一つであるが、^(二六) 此の兩者は共に現東京灣には殆んど棲

息してゐないと云はれる種類である。一方、魚類から見れば、大形のハモが相當多量に發見され、^(二七) ダツ、キダヒ等、現東京灣奥には餘り姿を現さぬ類の熱帶魚が出土する。

從來、石器時代の氣候論——海水溫度に關する論據は殆んど特殊の貝類のみに依つてゐた様であるが、^(二八) 以上の如き魚類に依る研究が進んだ曉には、貝類の研究と併せて、より確實な資料となるべき見込が充分にあると思はれる。

概して下組貝塚は魚骨の出土が極めて多い。從來一貝塚から檢出し得る魚類は四、五種を普通としてゐたのであるが、^(二九) 今回一八種を檢出し得たのは、恐らく始めての事と思はれる。これ等の種類を一瞥して、先づ其の多種なるに驚く。當貝塚は編年學上關東繩文式前期に位するのであるから、恐らくは漁獲した魚の種類も餘り多くない事と想像してゐたのに反して、豫想以上の魚類が檢出さ

れた。茲に、當時の漁撈法を考へねばならない。

いづれ本報告に發表されるであらうが、當貝塚からは、可成り多量の骨角製釣針が出土した。銚に使用されたかと想像される骨角器も有り、又、圓形の輕石の中央に貫通孔のある浮子かと思はれる遺物もある。漁具と想像される遺物は一應揃つてゐると思はれるのであるが、網の存在は不詳である。^(二七)しかし乍ら、マアジ、極く小さいクロダヒ(東京でチンチンカイズ、大阪でチンチンと稱する)、スズキの幼魚(東京でセイゴより小さいものをコッパと稱するが、その位のもの)等の骨が檢出される點より見れば、釣針や銚以外の漁法をどうしても考へざるを得ないのである。

又、キダイの如く、數十ヒロの深海に棲み、産卵時も淺海に現れないと云はれる類を漁獲してゐる點に於いて、^(二八)又、大形のブリを獲つてゐる點に於いて、當時の漁撈技術が想像以上であつた事を

知る事が出来る。

尤も、現在の、利巧になり、數も著しく減少した魚相手の現代の常識を以て、當時を律する事の危険は充分に戒心すべきものであらう。

干潮線附近に饒産するハマグリ、シホフキ等の類が貝塚から澤山出土する事は當然であるが、大形のミルクヒは現在では潜水夫に依つて採集されるものらしい。^(二九)魚類に就いて考へても、筆者は、潜水して銚を使用する漁法が當時盛んに行はれたものではないかと私かに考へてゐるのであるが、如何であらうか。^(三〇)

茲に附言すべき興味ある事柄として、當貝塚より發掘された糞石(Coproliths)の中より、極めて小さいスズキの上顎前骨(Premaxillary)の破片と、種名不詳の極めて小さい脊椎骨を檢出し得た事である。右の糞石は恐らく人間のものと思はれるが、^(三一)然りとせば、小魚は現代でも爲す如く、頭

から骨ぐるみ食べた證據として擧ぐべきものである。

又、當貝塚にはカキは多量に發見されたが、棒つきカキと明かに認めらるべきものは僅かに一例採集されてゐるに過ぎない。これに反して、拳大の礫に附着したまゝのカキや、その痕跡を残すものが極めて多數存在する事は注目に價する。^(二四)このカキの採集も亦潜水に依つて爲されたものであつたと思はれる。

以上は貝類魚類に依つての考察であるが、次に獸類を見るに、その發見種數は、極めて乏しく、野獸としては、シカ、キノシ、タヌキの三種に過ぎない。又、その發見量も餘り多いとは申せない。主として、シカとキノシ^(二五)、である。鳥類も僅か乍ら存在するが、今其種名を明かに爲し得ない。即ち、一般に鳥獸骨は少い方である。

この様な情況から、當貝塚人の動物質の食料は、

主として貝類に依つたものであり、季節に依つて、即ち秋から春までは野獸を追ひ、春から秋までの間は専ら魚類を獲つたと云ふ如き生業様式が窺へるのではなからうか。右の季節に依つて對象を換えたと云ふ考は、檢出された魚類の種類からも大體推定する事が出来る様に思はれる。^(二六)

最後に、當貝塚からも犬(家畜)は、可成り多數出土してゐるが、之に關しては目下齋藤弘氏に依囑して居るから、いづれ後刻發表が爲し得られるであらう。

四

以上、下組貝塚より檢出し得たる自然遺物——主として動物相に就いて列擧し、考察の大要を述べ得たと思ふが、徒らなる推論にのみ走りしやを恐れるものである。しかし乍ら、この下組貝塚と共に、早淵川溪谷に臨む諸貝塚の内、その發掘報

告の發表されて居るものは少く、又有りと雖も自然遺物の資料に關しては記載に乏しく、こゝに充分なる比較研究を爲す事の出来ない點は誠に遺憾である。

しかし、當貝塚に於いて、大山先生を始め、塾の學生諸君等發掘に従事された方々に依つて、極めて慎重なる採集が爲された結果、自然遺物、殊に魚類に於いて、從來貝塚より發見されざりし種類を得、又、種數も從來に比し多くを検出し得る事が出來た點は特記すべきである。けれども、筆者の不學の爲め、猶二三顯著なる特徴を有する魚骨にして、種名を詳かに爲し得ないものを殘して居る事を遺憾とする。是等は判明次第追加發表する考であるが、右の經驗に依つて、今後も慎重なる發掘採集を行へば、從來他動物に比して立ち遅れの感ある魚類に就ても、夥しい資料を得べき豫想が爲し得らるゝと同時に、その詳細なる研究よ

り、新なる課題の進展をも見るであらう。

こゝに附言する迄もなく、我國の石器時代文化は、一面貝塚文化とさへ呼稱され、その食料——殊に水産食料、漁撈等に關しては、最も重要な研究題目の一たるは疑ない事柄である。然るにこの方面の研究が、岸上博士以降、全く停頓の状態を續けつゝあつた事は、誠に遺憾である。この方面の研究の不振は、上述せる如き諸原因に依るものではあるが、その基礎となるべき自然遺物の研究の不足なるに依る事が、最も重大なる理由たるは明かである。

石器時代文化——殊にその生業に關し、更に詳しく云へば、漁撈、史前食料——殊に水産食料の究明の爲めには、自然遺物に關する詳細なる研究を、今後にも更に續行せねばならぬ事は云ふ迄もない事である。

猶、小篇に於ては、現下の世情を考慮して、圖

版挿畫等は残念乍ら一切割愛するが、是等の發表も他日に期して居るものである事を御諒承願ひたい。
(昭和十八年五月廿五日)

註

(一・二) 陸産種及びヤマトシシミの鑑定は、大山桂氏に御願ひした。記して、謝意を表する。

(三) K. Kishinouye: Prehistoric Fishing in Japan. (Jour. of the Col. of Agr. Imp. Univ. of Tokyo., Vol. II No. 7. 1911.)

(四) 岸上博士(前掲書)に依れば、堀之内貝塚より出土してゐる。其他、大山史前學研究所には、未發表のものがある。

(五) 岸上博士(前掲書)に依れば、鍬ヶ崎、細浦、沼津、屋敷濱、余山、立木の諸貝塚より檢出せられてゐる。其他、一王寺(宮坂、史前學雜誌二ノ六)、大宮臺(池上、史前學雜誌三ノ四)、最寄(直良、古代文化一三ノ一二)等より出土の報告がある。

(六) 鍬ヶ崎、獺澤、ナタギリ(岸上前掲書)、最寄(直良、古代文化一三ノ一二)より、出土が報ぜられてゐる。

(七) 鍬ヶ崎、堀之内より出土(岸上、前掲書)

(八) 堀之内、園生(岸上、前掲書)。

(九) 余山(イシガレイ)、鍬ヶ崎、中澤、堀之内(岸上、前掲書)。最寄(直良、古代文化一三ノ一二)。

(一〇・一一) 拙著、「史學漁撈關係資料としてのハモとコチ」(史前學雜誌一五ノ一)に、當貝塚出土のものに就いて觸れて置いた。

(一二) ハモの生態等は、拙著(前掲)にやゝ詳しく書いた。

(一三) 東京多摩川でマルタと呼ぶものは、一旦海へ降つて、五月頃産卵の爲め溯河する(田中茂穂、魚、七七頁、創元選書、等)から、若しこれであるとすると、淡水のみに居るわけではない。

(一四) 採集されしハイガヒの内、大なるものは、殻長六一耗、殻高四六耗、厚五耗。最も多く發見されるものは、殻長二五—四五耗位のものである。當貝塚のものは、形は大きくとも、子母口貝塚のものゝ如く重厚なる殻のものは見られない。

(一五) 當貝塚のインシシミは、既に酒詰仲男氏に依つて注目された所である(神奈川縣鶴見川谷貝塚出土の *Sanguinolaria olivacea* Jay インシシミに就いて、東京人類學會、日本民族學會聯合大會第四回記事、一七頁、昭和十五年)。今回の採集品の内、大なるものは、殻長四八耗、殻高三六耗、厚〇、八耗。殻長四七耗、殻高三四耗、厚〇、八耗位であるが、普通は殻長四五、殻高三二耗位から、殻長四〇、殻高二八耗(齋藤端造君資料)位の、殻の脆弱なるものである。これと、下田(西)貝塚のものとを比較して見ると、後者のものゝ方が、稍大形であり殻は、ずつと重厚である點(大給資料)、酒詰氏の報告と略々同じ結果を得た。

(一六) ダツは邦産四種位あるが、孰れも熱帯性のものである(田中、魚類學、昭和七年、等)。東京灣にも居るらしい(岡田利信、日本動物總目錄)が、サヨリ等よりは稍深所、外洋に多い(海老原、日本重要魚類圖集、昭和六年)。

キダイは數十ヒロの深い所に棲み、産卵時にも淺海に現れないと云はれる(田中、魚の科學、一一五頁、昭和十六年等)。相模灣、駿河灣で獲れた事があるが、極めて稀であり、東支那海に饒産する(大島正滿、魚、昭和十五年、等)。

(一七) 例へば、ハイガヒに依つて暖を、Barbatia, Spisula, Patinopecten に依つて寒をと、水温の變化のあつた事を示すものとされる松本博士の研究の如きである。(Evidences of the post-Glacial cycle of climatic change in north-eastern Japan. Sci. Rep. Tôhoku Univ., Ind Ser., XIII. No. 3.)

(一八) 普通検出し得てゐた種類は、マダヒ、クロダヒ、スミキ、ボラ、であつて、これ等の種類は、單に検出法を知る者が多かつた爲めのみならず、他種に比して、各地の各期貝塚から、極めて多量に出土するものである。この他、エヒ、フグ等検出されるが、之等は種の細別まで爲すに至つてゐない。

(一九) 當貝塚の纖維土器の表面にも、網狀に交叉する文様を澤山見受けるが、之には結び目は無く、或は結節のない網の壓痕と思はれる如きものも見當らない。

(二〇) 註一六、参照。

神奈川縣下組貝塚に於ける自然遺物(大給)

(二一) 三浦定之助、潛水の科學、二七八頁、昭和十六年。

(二二) 之に就いては、近く發表する「上高津の自然遺物」に於いて稍、詳しく述べる考である。

(二三) 當貝塚出土の糞石は、塾の醫學部に托したが、詳細は不明であつた。糞石の内には、極めて太い骨の碎かれたものが多量に存在するものを屢々見るのであるが、是等は恐らく犬の糞ではないかと考へてをる。之に反し、この糞石には大きな骨の破片も混じて居らず、僅かに、二三片の小魚骨を見出したのである。

(二四) 棒つきカキに就ては、酒詰氏が論ぜられた事がある(所謂棒つきカキに就いて、東京人類學會、日本民族學會聯合大會第四回記事、一九頁、昭和十五年)。當貝塚發見の一例は、直徑約二五耗位のやゝ太い棒に附いた痕跡がある。

磔つきカキの方は、磔についたまゝ採集されたものもあり、數量も非常に多い、この事實は、發掘に際し、現場に於いて、既に大山先生も氣付かれて居られた由であるし、又、先生の御話では、子母口貝塚からも多數に發見したとの事であつた。現に磔にカキを着かせる方法もある事であり、棒つきカキの場合と同様に、人工的に、意識的に行はれたと考へる可能性が充分にあると思はれる。

(二五) 見事な鹿角は澤山出土してゐるし、之等は殆んど皆、角器として利用されてゐるものである點に驚かされる。

(二六) 鹿猪の如きは、秋から冬にかけて里近く下つて來るが、

餌の豊富な夏期は、林の奥等に深く入り込んでゐるものである。一方、魚類は、殊に當貝塚検出のものを一瞥するに、冬期沿岸で獲れる類は見當らない。又、一般に熱帯性のものは、その分布の北限近くに現れる時期は、主として夏であるらしい點も考慮される。スゞキ、クロダヒ、ボラ等も、現在漁獲される季節は、春から秋であるし、他の魚類も略々同様である事は海釣をきれる方ならば大抵御承知の事であらう。以上の事柄から、漁撈の季節と、狩獵の季節とを大體別に考へ得

るし、現に東北の漁村に於いて、夏は海に漁し、冬は山に狩る者のある事から（筆者は山形縣下で、よく見聞した）、當石器時代人も斯る生活を行つてゐたものではないかと想像するものである。

附記。上述の魚類に關しては、財團法人風樹會よりの御援助に依つて爲しつゝある研究の一部なる事を銘記して、同會に對し謝意を表する次第である。